

大河原氏と国宝長船の名刀



大河原 次雄

予科22-8

本科航空4-1

(岡山市)

【前書き】栃木の坂元直彦君(6-8)を介して岡山の大河原次雄君(22-8)の標記の資料を頂いた。この資料によれば、大河原君の祖先は秩父出身の関東武者で、戦功により播磨の国に移封されたが、秩父神社造営時に長船の名刀2振り(大太刀と短刀)を秩父神社に寄贈された。

この様に埼玉と密接な関係を持つ大河原氏と長船の名刀の由来に関する大河原君の資料を次に紹介したい。(編集子)

1. 大河原氏は埼玉県秩父郡東秩父村

大河原郷の出である

同族の武蔵七党の先祖は殆ど国司として各地に赴任していたが、12世紀(源頼朝鎌倉幕府を作る)の中頃に武蔵七党が組織された。大河原氏は武蔵七党のうち丹党に属していたが、丹党の勢力は埼玉県の秩父・児玉両郡を基盤として東は入間郡(入間市・所沢市)から上野(東京)に、西は信濃にまで及び、関東武者として有名を馳せた。

2. 大河原氏播磨の国に移封される

後鳥羽上皇が倒幕のため挙兵した承久の乱(1221)では、勝利した鎌倉幕府は戦功として武蔵武士たちを西国地頭の地位を与え西国に送り込んだ。

大河原氏も播磨の国三方西(現在の兵庫

県宍粟郡波賀町)に移封され、大河原時基は波賀城を築き城主となった。波賀町一帯は良質の砂鉄と豊富な木材の資源に恵まれ、大いにその勢力を伸ばした。特に砂鉄は備前鍛冶(長船等の刀鍛冶)を支える鉄の一大供給地であった。

3. 長船の名刀を秩父神社に奉納

1323年(元亨3年)大河原時基は備前国の刀工長船景光を三方西に呼び、短刀を作らせた。その刀身には「秩父大菩薩」の文字と「備前長船住景光」の銘が刻まれている。

更にその2年後1325年(正中2年)に再び大河原時基は長船景光及びその弟子の長船景政に命じて大太刀を作らせた。この2振りの名刀は、当時焼失した秩父神社の再建に際して奉納された。

秩父神社に奉納された短刀はその後上杉謙信の手に移り「謙信景光」と呼ばれ、以来長く上杉家が所蔵していたが、1990年埼玉県が買い取り、埼玉県立「歴史と民俗の博物館」に保管されている。

秩父神社に奉納された大太刀の方は現在、宮内庁に保管されている。いずれも国宝である。

それとは別に、大河原時基は1329年(嘉歴22年)長船景光、景政に命じ直刀を作らせている。この太刀には「武蔵の国秩父郡住大河原左衛門尉丹治時基」という銘が刻まれており、時基の秩父に対する望郷の念の深さを窺い知ることができる。この太刀は兵庫県の広峰神社に奉納されたが、1580年豊臣秀吉が姫路城を攻撃した際神社から入手し、その後徳川家康に与えられた。1662年四代将軍徳川家綱の日光参拝の折り、この太刀は宇都宮城主奥平美作守忠昌に与えられた。以降同家が所蔵していたが、現在は上記「歴史と民俗の博物館」に保管されている。国宝である。

4. 埼玉県立歴史と民俗の博物館

この博物館は、埼玉県内の博物館、資料館の統合計画により、新たに2006年4月に開館された博物館で大宮公園内にある。武蔵武士の誕生等を含めた歴史展示室、民俗展示室、美術展示室等を備えている。目玉の展示品は、国宝の長船の名刀2振り、国宝の法華経一品経、重要文化財の太平記絵巻等である。長船の名刀は、秩父神社に奉納された短刀と広峰神社に奉納された太刀である。秩父神社に奉納されたもう一つの太刀は現在宮内庁に収蔵されている。

なお、大河原氏の館跡と云われている埼玉県秩父郡東秩父村に建てられた「ふるさと文化伝習館」には、上記の時基が秩父神社に奉納した短刀と太刀のレプリカおよび広峰神社に奉納した太刀のレプリカが展示されている。

5. 大河原氏のその後の軌跡

天下を二分すると云われた山名氏と細川氏の争いの応仁の乱（1467年）では、山名教清の居城岩屋城（岡山県久米郡久米町）を細川方の赤松政則の将大河原治久が攻め落とし、治久はその城主となり、美作一帯を制圧し、赤松政則は播磨、美作、備前の守護となった。

以後、百年にわたり戦国時代となり、岩屋城は尼子、毛利、宇喜多の争奪の場となり、大河原一族は各地に四散した。私の祖先大河原孫衛門（1596）一族は宇喜多の家臣になっていたが、関ヶ原の戦いで宇喜多が滅亡したので、邑久郡山手に土着した。

大正5年頃一族で岩屋城を想起し、岩屋宮という祠を建立した。私の祖父大河原磯治は土地の資産家祇園氏の娘菊と結婚し、祇園家の岡山市門田屋敷1780坪に移り住み、長男に祇園家を継がせた。そして次男の私の父時雄を大河原家の跡取りとした。私の子供時代、岡山市内の大河原一族は、祖父磯治、父時雄、叔父常晴と極めて

僅かであった。

戦後、私は陸士の先輩が指導する岡山の日本原演習場の開拓帰農団に参加したが、マッカーサー司令部の命令で解散させられた。その後、中国塗料（株）に工員として就職したが、副業の石けんとバンドの販売で得た資金で昭和22年独力で大河原農機商会を設立する。昭和30年兄と共に大河原農機（株）を設立したが、昭和34年、大河原農機を兄に託し、動力部門を独立して大河原機械（株）をオーナー社長として設立した。この会社は機械化農業の波に乗り、社業は順調に発展、昭和40年には高松支店を立ち上げ四国方面にも販路を拡大した。

昭和29年頃から米国の小型耕耘機の販売を手がけたが、軽量で傾斜地の畑作にも適していたので大いに販売実績を伸ばした。この実績が国際交流への端緒となり、昭和41年ライオンズ倶楽部への入会、岡山市の米国カルホルニア州サンノーゼ市との姉妹都市縁組みを契機として積極的に国際交流の支援、実行に参加し、家族ぐるみでホームステイの受け入れや派遣を行っている。

一方、地元の岡山偕行会では昭和54年から平成15年迄24年間会長を勤め、その前後事務局長を長らく務めた。

なお、60期の大河原勉君(23・10・横浜市)も岡山県邑久郡邑久村山手の出身で大河原氏の一族である。